



イメージの重なりが創出する新しい表現を

伊藤桂司

幾層にも折り重なったビジュアル。伊藤桂司氏のポスターは、数ミクロンのインキとニスのなかに出現したスペクタクルとなった。常に制作への衝動を抱えつつ実験的な手法を用いて新たなパラダイムを探求し続ける伊藤氏に、今回のトライアルについて話を伺った。



—作品コンセプトをお聞かせください

印刷物とは重層的なものだという考え方を以前から持っていました。そこでこのトライアルでは、重層性をもたらす視覚的な効果についてアプローチしてみることにしました。印刷物になると、どんなに広大な風景であっても平面に置き換えられます。広大な風景は光学機器によって写真として切り取られ、ポスターや雑誌に印刷されます。それを見た人は、印刷された風景に無限の空間を感じ取ります。ところがこの疑似体験は、紙の上の数ミクロンというインキの厚みによって引き起こされているわけです。このインキの皮膜という極薄の世界で起こるスペクタクル、この不思議さをあらためて考えてみたいと思いました。

—トライしてみたの感想は

オリエンテーションから現在にいたるまで、このプロセスの全てがとても勉強になりました。オフセット印刷でトライをという目的がハッキリしているだけに、自分のやりたいことを形にしていきながらいろいろな角度からそれぞれの専門の方に教えてもらえた、という気がしています。自分が印刷会社に入っていたら仕事で覚えていくような内容を、この短期間で集中的に教えてもらったような感じです。それから、今回のトライアルで得た発見は、この展覧会で発表したポスターだけで終らせたくないと考えています。どれだけ実用性を持たせることができるかというリアルな視点でも考えたいです。実際の仕事となると、メディアによっていろいろ条件が違いますので、このままの形で実現できるか微妙ですが、何かいい形で次の活動に反映したいと思っています。

—私たちも初めてのことがずいぶんありました。ニスの4度刷りもそのひとつでしたが、ニスを選んだのはどんな理由があったのですか

完成したポスターにはもちろん色も使いましたが、色彩だけではないアプローチで表現ができなかったんです。それから、ニスとインキを厚く刷って層をつくることで、紙の表面を違う物質に変化させることができないかな、という企みも頭の片隅にありました。でも、ニスをここまで厚く刷り重ねることは今まで体験したことがないですから、結果が全く予想できませんでした。いろいろ細かく変化させながらテストしていただくことで、すごく効果があるものや面白いものが発見できましたね。

—「紙を違う物質に変化させる」という発想は以前からあったんですか

広告などで紙なのかわからない質感のものがありますよね。そうしたものを目にするたびにじっと興味深く観察していました。それから本などで

は、ビジュアルの強度を増すためだったり、摩擦による印刷面の汚れ防止などでニスを使うことがあります。そうすると、ニスによる光の反射率の変化で、紙の質感が変わって見えたりしますよね。そんなこともあって、ニスにはとても興味がありました。ただ、オフセット印刷ということで、ニスの厚みには限界があることも事実です。特殊印刷やシルク印刷のように際立った厚みは無理ですが、それでもオフセット印刷なりのニスによる効果が現れば満足です。

**ビジュアルというカテゴリーで、多種多様なアプローチを続ける伊藤氏。
あらゆる仕事を実験の場として捉え、常に新しい表現を求めているという。**

——ところで、印刷物が重層的だとおっしゃいましたが

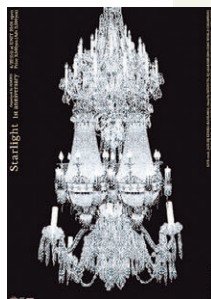
物理的な側面というよりは、それが意識や精神に影響を及ぼすという意味で重層的だな、と。結局、網点による光学的な錯覚を生かした発明が、印刷における表現に無限の可能性を与えたのではないのでしょうか。印刷というのは、クリエイティブワークを落とし込む多種多様なメディアのひとつにすぎません。今回は印刷を特に意識してクローズアップできたことで、今までとは違うアプローチができたと思います。どんな仕事でも、できるだけ実験的な要素を入れるようにしています。そうしないと長く続かないし、自分も面白くない。今やっていることが次の作品や活動に繋がればいいな、と考えています。ものをつくっている身としては、いろいろなイメージやアイデア、感覚がいつもどこかにあります。例えば、自分の中に複数の人間がいるようなものですね。

——伊藤さんの作品には決まったスタイルがなく、さまざまなアプローチで作品をつくられているようですね

そうなんです。ひとつのスタイルだけでやっているとお苦しくなってきたり閉塞感に襲われてしまう。だって、毎日ラーメンとかハンバーガーとか同じものばかり食べていられないでしょう(笑)。自分のアイデアや感覚に対して、いかに自然に対応できるかを考えているうちに、こういう方法論にたどりつきました。ライアル・ワトソンに「ネオフィリア」という著書があります。ネオフィリア、つまり「新しもの好き」でないと過酷な生物の進化においては生き残っていくのが難しいという仮説です。たとえば、アリクイは蟻がいなくなったらその段階で同時に滅んでしまうわけです。もちろん進化もない。人間は、本来がネオフィリックだからこそ、これだけの思考と行動様式をものにできたと書かれています。以前、それを読んで「あ、間違えていないのかもしれない(笑)」と思えたんです。



愛知万博 EXPO2005
ポスター



STARLIGHT
一周年記念イベントポスター

Works by Ito Keiji



ボニー・ピンク
CD ジャケット



ABSOLUT VODKA
WEBSITE トップページ

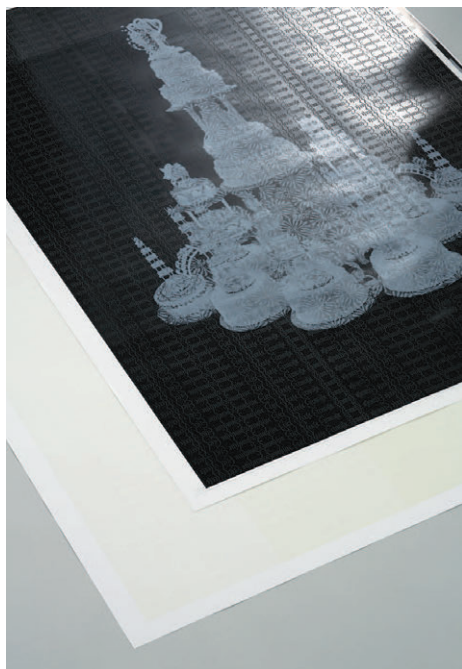
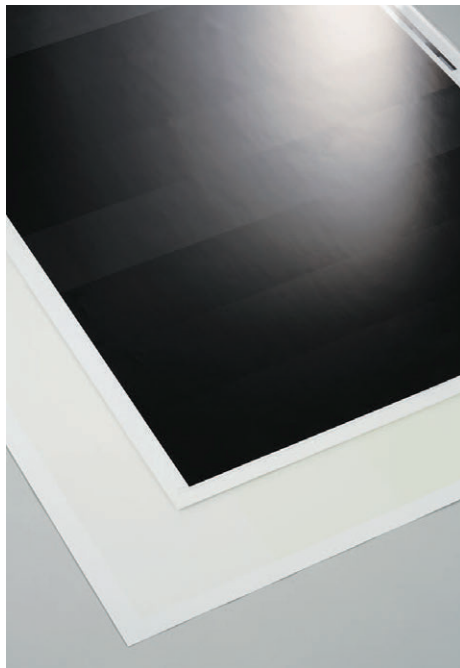
——これからも実験的なアプローチで活動を続けていかれるわけですね

単にビジュアルをつくる仕事というレベルではなく、もっと違うレベルの力に突き動かされているように感じるんです。もともとこの世界に入ったのも、ここがそういう世界だと思ったから。横尾さん、田名網さんや湯村さんたちを見ても、職能的にモノ創りをとらえているのではなく、モチベーションがまずあって、時代背景や世の中の流れなどと対峙しながらどうやってつくり、応えていくかというスタンスで活動していると思うんです。だから特に最初の頃は仕事としての意識があまりなくて、仕事は絵を描くことや何かものをつくることとイコールであつたし、それがグラフィックという行為だったんです。この姿勢は活動を始めた頃からずっと今に続いてますし、こういう場だからこそグラフィックの世界が面白い。若い頃にアナログレコードを見て思った、1枚の四角い印刷物があらゆる世界への入口なんだというどこか初々しい感覚(笑)は、大切にしたいですね。

■ ■ ■ スタッフより

「紙の質感を変えたい」という伊藤氏からの最初のリクエストは、我々にとってまったく予想外でした。しかも、ピアノの表面みたいな漆黒の質感と象牙のような質感をつくりたいとのリクエスト。その結果、我々も経験したことがないスミの4度刷りやニスの4度刷りという実験になりました。さらにこの上に、ビジュアル、ニスと重ねて印刷することで、伊藤氏のビジュアルをニスの層でサンドした状態を見てみることに。結果として、伊藤氏が想定したイメージ通りだったかはさておき、伊藤氏はこの実験によって何かを掴んだようでした。次のテストは、2種類のビジュアルをグロスニスやマットニスで重ねて刷り、その視覚効果を比較検討しました。この結果、ニスだけでも、やり方によってはかなりビジュアルを表現することができることがわかりました。トライ&エラーを重ねてから、最終的にポスターのビジュアルがまとまるまでかなりの熟考がありましたが、仕上がりはやはり伊藤氏らしい新しさとクールさ溢れるポスターとなりました。

ニス为主体にした
多層的表現の追求



インキの厚みを確認める

1
スミの重ね刷りとニスの重ね刷りのチャート。それぞれ1度から4度の重ね刷りが比較できるようにになっている。ピアノのような漆黒の質感、象牙のような質感を追求した。

2
オペークホワイトとニスで
ビジュアルを重ねてみる

スミとニスの重ね刷りチャートの上に、オペークホワイトとマットニスでビジュアルを印刷。オペークホワイトで印刷したビジュアルの上からマットニスでビジュアルを刷るとどのように見えるのかを確認した。

グロスニスとマットニスでビジュアルを重ねて印刷。グロスニス、マットニスで印刷されたビジュアルがどんな見え方をするのかを確認。またニスに微量のインキを調合した場合の見え方も検証した。

3
ニスでビジュアルを
重ねてみる



4
仕上がり



ニスなどによるビジュアルの重ね刷りが伊藤氏のコラージュ的な作風と一体化して、斬新なグラフィックデザインに仕上がった。下地に印刷したニスの上から印刷したスミに独特のテクスチャーを与えたり、薄いグレーで印刷したビジュアルが画面に奥行きを持たせたり、随所に面白い表現が見られる。



a



b

a. 用紙：ルミナカード/スノーホワイトL判200Kg 版の構成：銀→グロスニス→スミ→グロスニス（2度）
 b. 用紙：ルミナカード/スノーホワイトL判200Kg 版の構成：グロスニス→特色グレー→マットニス→銀→スミ